

# 渋沢栄一の「信」の認識

COLUMN  
県内  
大学発

## 経世済民

埼玉学園大

516

私たちの郷土の偉人である渋沢栄一が、いよいよ新1万円札に登場することになりました。渋沢が日本のお札の顔として選ばれたのは、「日本資本主義の父」と称されるに値する日本経済発展への多大なる貢献のゆえと考えられます。

日本初の本格的な銀行を設立し、500社余りの企業創立に関わった渋沢が、精神面でもどこまでしたの、論語を中心とする中国古典に基づく思想でした。論語には多くの徳目が記述されていますが、渋沢はその全てについて、実践経験を踏まえた独自の解釈を加えました。そして、その解釈を教説として講述し、それらをまとめたものを渋沢思想として後世に遺しました。

論語に多く記述される徳目の

中でも、実践者である渋沢が最も身近に感じ、かつ尊重したものの一つに「信」がありました。信という徳目は、経済活動をはじめとする人と人との関係において、信義、信頼、信用、信念などに展開され、私たちが順守すべき具体的な行動規範となります。

とりわけ経済活動における信用は、言行を一致させることと、誠意ある行動を積み重ねることによって築かれることを渋沢は認識し、信用にもこの「の」のない実践を生涯貫きました。

経済活動は、商品やサービスの対価として金銭授受をともなう取引が基盤であり、信頼関係の崩壊は金銭の損失に直結します。金銭の損失を伴うトラブルは商業活動の停滞につながる。



大江 清一  
経済経営学部特任准教授

さらには経済活動全体の停滞に結び付く大きなリスクとなり得ます。商業道徳を軽視し、利己主義的な行動をとり続ける近隣の某国が、主要先進国からその姿勢を指弾され、大きなトラブルに直面している事実を捉えても、信頼関係の棄損が個別の商取引にとどまらず、国益すらも大きく損なうリスクにつながることを、まさに現代の私たちは目の当たりにしているのです。

「このように、痛快小説の主人公のような無鉄砲で純粹な心を抱き続けながら、その一方で、現実的な多くの困難を打開し、日本資本主義の基盤を作り上げた渋沢栄一を輩出したことに、埼玉県民である私たちは堂々と胸を張り、誇りとするべきではないでしょうか。」

渋沢は、自らが熟考の末に正しいと思いついたことを、誰に対しても譲歩することなく主張し、実行する勇氣を持っていた。渋沢は信念を貫くことによって自らの地位が失われることがあっても、一切それを厭（いと）いませんでした。

渋沢が大蔵省を退職することになったのは、予算管理を巡って大蔵卿であった大久保利通と対立し、一歩も譲らず激論を戦わせたことがきっかけでした。

「このように、経済活動においては「信義」を重視して行動し、「信用」を得ることによって「信頼」関係が構築されるというのが基本ですが、渋沢には、これに加えて「信念」に基づいて行動するという信の本義に関わる行動規範があります。」

おおえ・せいいち 埼玉学園大経済経営学部特任准教授。1952年生まれ。慶応大学経済学部卒業。埼玉経済科学研究所博士課程後期修了。博士（経済学）。第一勧業銀行（現みずほフィナンシャルグループ）、いすゞ自動車、神奈川大経済学部非常勤講師を経て、2016年4月から現職。専攻は経営学、金融史。主な著書『義利合一説の思想的基盤』（時潮社、2019年）、『銀行検査の史的展開』（時潮社、2011年）など。